

2020年度 創価大学法科大学院

S日程 小論文試験

問題1 (配点50点)

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

A 子どもは、個人的に外界と接触するにさいしては、幾分狭い世界に生活しているのである。何事によらず、物事というものが、子ども自身の幸福、あるいは家族や友人の幸福に対して、直接かつ親密に、そして明確なかたちで接点をもたないならば、その物事は子どもの経験のなかには、ほとんどはいり込んでこないことになる。子どもの世界は、事実や法則の領域というよりは、個々の子どもが、個人的に興味をもっている人たちからなる世界である。子どもの世界で真実なことは、外部にある事実に従属するような意味においてではなく、他者に愛着をもち、共感をもつという意味においてであって、そのことこそ、子どもの真の実体の基調をなすものである。この点について再び考えてみると、子どもたちが学校で出会う学習課程は、時間的には際限なく引き伸ばされて、登場してくる教材を提示し続け、また、空間的にはこれまた、際限なく外部に向かって拡大される教材を提供している、ということなのである。子どもは、自分が馴れ親しんだ自然の環境、つまり一マイル四方そこそこの地域を越えるようなところにはほとんど住んだことのない生活環境から連れ出されて、より広範な世界—そう、太陽系の空間領域さえまでも—へと連れ込まれていくのである。子どもが個人に身につけた記憶や慣習は、ほとんどないといってよいほど小さな範囲にすぎないものではあるが、それは、幾世紀にもわたる全人類の歴史によっておおいかがせられ圧倒されるのである。

さらに言うと、子どもの生活は、一つの統合された生活であり、一つの総体的な生活である、ということである。子どもは、ある一つの話題から別の話題へと、ある個所から他の個所へと迅速かつ着実に移行していくものである。しかも、そのさい、子どもには、物事を打ち壊したという意識もなければ、移り変わっているという意識もないのである。そこには、孤立感もなければ、ほとんど区別されるという意識すらもたないのである。子どもの心身を占有している事柄はというと、それは子どもの生活が展開するに従って、個人的な興味と社会的な興味とが一体になったものによって、統合されたものである。子どもは心の中で、最上位におかれるものはどのようなものであれ、それらは宇宙全体を構成するものであると、当分のあいだ思っているのである。子どもにとってのそのような宇宙は、移りやすく流動的である。その宇宙の内容は、驚くべき速さで解体されたかと思うと、

すぐさま再構成されるものである。しかしながら、結局は、その種の宇宙全体が、子ども自身の世界にほかならないのである。その子どもの世界は、子ども自身の世界として統一されており、それ自体で完結しているものである。子どもが学校に通うようになり、そこで、多様な教科が子どものためにある世界を分断し、それを細分するのである。教科である地理を取りあげてみよう。地理は、一連の事実をある特定の観点から抽象化し、分析したものである。算数も、教科として、いま一つの区分を構成する。文法もまた、別の教科区分であり、そのようにして、際限なく教科区分ができることになる。

さらにまた、学校では、これら教科のそれぞれが、類別されることになる。諸事実は、経験上生じたその場所から引き離され、ある種の一般的原理に照らして再配置されることになる。分類は、子どもの経験にかかわる事柄として、おこなわれるのではない。したがって、事物は、子どもにとって、個別的なレベルで、分類整理されることはないのである。愛情による生きた心の結びつきや、活動をとおしての連結した絆により、子どもの多様な個人的な経験は統合されるのである。おとなの精神は、論理的に秩序立てられた事実についての観念に親しく馴れているので、そのおとなの精神は、直接経験による事実が、「教科」あるいは学問の専門分野として現出される以前に、そのような直接的な経験という事実が、その後どれほど分割され再定式化されていくかについては、実感することもできず、また認識することもないのである。原理というものは、知識人にとっては、弁別され限定され、定義づけがなされていなければならないものである。そこで事実というものは、それ自体としてあるがままにではなく、この原理というものに関連して説明されなければならないものである。事実はまた、まったく抽象的かつ観念的な新しいセンターの周りに、再び集められなければならないものなのである。このようなことは総じて、特殊な知的興味を発達させることを意味するにすぎない。また、このようなことでは、事実を公平かつ客観的に見る能力だけが、人間自身の経験のなかにおいてこそその事実が位置づけられる拠り所や意味があるということとはかかわりなく、重視されることを意味することになるのである。さらにまた、このことはすべて、事実を分析し総合する能力だけが、大切にされることを意味する。そのようなことはまた、高度に熟達した知的習慣と、科学的探究のために要する一定の的確な技術と装置を意味するのである。分別分類された教科は、端的に言うところ、時代ごとの科学からの産物であって、子どもの経験から生み出されたものではない。

これら子どもとカリキュラムとのあいだに明白にみられるような、食い違いや相違は、およそ際限なく拡大されるにちがいないであろう。しかも、そこには根本的な相違がみられる、といってもさしつかえないのである。まず第一には、子どもの狭い個人的な世界と、時間的にも空間的にも、非個人的つまり一般的に、際限なく拡大された世界との対立が、根本的な相違として取りあげられるのである。第二には、子どもの生活のひたすら全精神を傾注しての統一性と、カリキュラム上の教科専門や教科区分との対立関係、第三には、教科の論理的な類別や配列と、子どもの生活上の実際的で情緒的な絆との対立が、両者の

相違を根本的なものに行っているのである。

(中 略)

B それでは、問題の核心はどのようなものであろうか。それは、子どもの経験と、学習課程を編成してきたさまざまな形式の教科とのあいだには、本来の性質上(種類は異なっているが)ある種のギャップがあるという偏向した観念から、まさに脱却することにほかならない。子どもの側面からみると、その問題は、子どもの経験が、公式化された教科学習のなかに導入されているものとまさに同種の—事実や真実という—要素それ自体の内部に、どのようなかたちですでに含み込まれるのかについて、考察する問題でもある。また、もっと重要な問題は何かというと、つまり、今日、教科が有効なものとして占めている水準にまで、教科を開発し編成するうえで影響を与えてきた態度や動機や興味といった要素が、公式化された教科それ自体のなかに、どのようにして含まれているのかという問題である。教科の側面からみると、その問題は、教科というものを、子どもの生活のなかではたらいっているさまざまな力の自然の成りゆきの結果として解釈する、という問題である。また、それは、子どもの現在の経験と、教科の豊かな成熟とのあいだに介在する、ステップを発見するという問題でもある。

教科は、子どもの経験の埒外にあり、それ自体が既成のものであり、固定したものであるとするような教科の観念を放棄して、そして、子どもの経験もまた、何か硬直し固定したものとして考えるようなことを止め、子どもの経験を何か流動的で胎芽的で闊達なものとして考察してみよう。そこでわたしたちは、子どもとカリキュラムは単一の過程であることを明白にしたうえで、その単一の過程に二つの区域を認めているにすぎないものである、ということを知ることになるのである。一直線のなかに二つの要点があることが明白に示されるのと同じように、現在の子どもの立場と、教科における事実と真実とが、教育するということの範囲を限定することができるというのである。そこで教育するということは、絶えざる再構成であり、それは子どもの現在の経験から出て、わたしたちが教科と呼ぶ、あの真理の組織体によって象徴的に表現された経験へとはいり込んでいくという意味において、不断の再構成ということになるのである。

外見上観察してみると、さまざまな教科目、つまり、算数・地理・言語・植物などといったものは、それ自体が経験であるといえるのであり、すなわち、それらの教科は、人間の経験なのである。教科は、人類が世代から世代へと努力し、奮闘し、そして成功してきた成果の累積を体現しているのである。教科というものは、そのような人類の成果を、たんなる蓄積としてではなく、また、小間切れのようになされた種々雑多な経験を積み上げたものとしてではなく、多少は組織化し系統づけるやり方で、すなわち、反省的に公式化されるやり方で提示されたものである。

このようなわけで、子どもの現在の経験にはいり込んでくる事実や真実、および教科学習での教材に含まれている事実や真実というものは、一つの現実を表わすうえでの最初にして最後に使われる用語にほかならない。あるものと他のものが対立するということ

は、同じように成長していく生命にとって、幼児と成人との対置があるようなものである。その対置とは、移行していく傾向と、その傾向の最終結果とを、相互に対面させているようなものにすぎない。また、その対置とは、子どもの本性と運命とが、相互に争っているようなものとして捉え理解すべきものである。

(出典) ジョン・デューイ『学校と社会・子どもとカリキュラム』市村尚久訳
(1998年、講談社学術文庫)

【設問 1】

Aの文章を読んで、「子どもの世界(生活)」と「学校における教科区分(カリキュラム)」の特徴を、それぞれ200字以内で要約しなさい。

【設問 2】

Bの文章を読んで、子どもとカリキュラムとの食い違い(相違)を克服するためには何が重要かについての筆者の考えを400字以内で要約しなさい。

2020 年度 創価大学法科大学院

S 日程 小論文試験

問題 2 (配点 50 点)

問題文の指示に従って論理的で説得力のある文章を作成しなさい。

なお、本問は架空の設例であり、法律の知識を問うものではない。また、文章の形式（意見書や上申書など）に留意しなくてよい。

【問題】

某高速道路のインターチェンジ出口付近に、20 台の自家用車が駐車可能な個人経営のコンビニエンスストア M があった。M 店は X が店長、X の妻の Y が副店長を勤めており、その他数名のアルバイトと 24 時間営業を行っていたが、この度、深夜アルバイトの担当であった学生 A が就職と共に M 店を辞めることとなった。M 店では、A の代わりとなる深夜アルバイトの募集を行ったが、数週間にわたって一向にアルバイト希望者が現れなかった。仕方なく深夜アルバイトの時間帯は X 及び Y が交代で業務についていたが、X 及び Y は昼間の同店の業務にもついていてため睡眠不足となり、身体的に辛い状況が続いていた。そこで、X は M 店を 24 時間営業ではなく、朝 6 時から夜 11 時までの 17 時間営業にすべきではないかとの考えに至り、Y に相談をしたところ、Y から M 店はインターチェンジの出口近くにあり、毎日深夜にインターチェンジから降りてきた長距離トラックの客が多いこと、また、M 店を利用する近所の常連客も多いことから、数週間利用客にアンケートを採って決断をすべきだとの意見が出された。そこで、M 店利用客に対し、M 店が 24 時間営業を継続すべきかに関するアンケートを採ってみたところ、百枚を超えるアンケート用紙が回収された。アンケートの集計によると、M 店が 24 時間営業から 17 時間営業に変更することについて、アンケート総数の 45% が賛成、40% が反対、15% がどちらでも良いとの結果となった。また、自由記述欄には大別すると以下のような意見があった。

〈アンケート自由記述欄の意見〉

- ・インター出口付近は薄暗いし、以前痴漢も出たことがある。女性が深夜帰宅する際にコンビニの明るい光がついているのはありがたいので、24 時間やってほしい。
- ・最近、無人レジも出てきているから、深夜営業だけ M 店でもやってみては。
- ・朝も昼も夜も駐車場に車がたくさん停車している。買い物もしないで駐車場を休憩所に使っているような客がいて不快。いっそのこと 24 時間営業をやめた方がいい。
- ・電気代は節約すべき。24 時間でなくても良い。

- ・深夜の長距離運転の際のオアシスなので 24 時間やってほしい。多少深夜料金を払ってもいいから。
- ・時々、深夜に長距離トラックの運転手や不良少年がたむろしているのが怖い。たまり場にならないように 24 時間営業をやめて欲しい。
- ・M 店近辺に住む住民は基本的に朝起きて昼仕事して夜寝るのが一般的な生活であって、深夜に利用しているのはたいていよそ者。24 時間対応する必要なし。
- ・M 店以外のコンビニは M 店から 2 キロ以上離れているので、是非 24 時間営業を続けて欲しい。
- ・M 店の店長夫婦で一日中経営するのは可哀想。24 時間営業でなくてもよいので、体調を大事にしてほしい。
- ・短縮営業せざるを得ない状況になっているコンビニも増えていると聞くから、早めに短縮営業を開始して全国のモデルケースになってみてはどうか。
- ・地震が来たときの避難場所として 24 時間やってもらった方が安心。
- ・欲しい物をすぐには買えるのがコンビニ。24 時間営業であることに意義がある。かかりつけ医のような存在でいて欲しい。

今回実施したアンケートは M 店利用客に対し任意で記入を依頼したものであるが、昼間・深夜及び老若男女を問わず比較的多くの利用客が回答しており、利用客の事実に基づいた意見が反映されている。また、アンケートを実施した際に利用者数の調査を行ったところ、M 店利用者のピークの時間帯は朝 6 時～9 時までと夕方の 5 時～7 時までで、午後 11 時以降の時間帯の利用者数は昼間よりは減るものの利用客が全くいない時間帯はないことがわかった。

なお、追記すべき事項として、3 年後には M 店から 300 メートル離れた先に専門学校が新設されることとなっており、専門学校の学生による M 店利用客が増えること、また、アルバイト希望者が出る可能性が高いことが挙げられる。

以上の事実を踏まえ、M 店の 24 時間営業を継続するか否かについていずれかの立場に立ち、その結論に至った理由を 3 点以上挙げながら自身の見解を論じる文章を書きなさい。